

広汎性発達障害児に対する SST グループ訓練

かがわ総合リハビリテーション病院 リハビリテーション部

言語聴覚士 古谷 まどか、河村 美香、宮下 鮎美、宮地 理紗、中川 弘子

キーワード：広汎性発達障害、小児、SST グループ訓練

要 旨

当センターの言語療法室では平成 23 年度より、知的に遅れを伴わない広汎性発達障害児に対して、SST グループ訓練を実施している。グループ訓練の目的は、自分の周りの状況に気が付く・相手の気持ちを考える・自分と相手との違いに気が付く・自分の行動をコントロールする力を養う事により、対人関係能力や社会性を伸ばすことである。内容は始まりの会、ウォーミングアップ、場面設定課題、ロールプレイ、終わりの会、保護者へのフィードバックの順に行う。グループ訓練では、いくつかの問題点が出てきたため、問題点に対して工夫や環境設定を行っている。グループ訓練を行うことにより子ども達と保護者ともにあったか言葉を意識できるようになり、ソーシャルスキルチェックシートにも変化がみられた。また、グループ訓練の様子と保護者とのフィードバックから、集団での問題点も予測しやすくなり生活の中で生かせる課題設定を考えることができるようになった。今後もグループ訓練を行っていくうえで、保護者や幼稚園・小学校と情報交換を行っていくことが重要と考える。

1. はじめに

広汎性発達障害とは自閉症やアスペルガー症候群などを含む、コミュニケーションの障害や対人関係、社会性の障害であり「言葉でうまく説明できない」「相手の気持ちや状況理解が難しい」という特徴がある。

当センターの言語療法室には、現在約 750 名の小児の外来患者様が来院しており、約 6 割は広汎性発達障害である。このうち、知的な遅れを伴わず、個別の言語訓練では課題に比較的スムーズに応答できるが、幼稚園や小学校の集団生活で対人関係に問題がある子ども達の来院が増えてきている。そこで、こうしたケースを対象に平成 23 年度よりソーシャルスキルトレーニング(以下 SST)グループ訓練を実施している。

2. 概要

SST グループ訓練の目的は、①自分の周りの状況に気が付く ②相手の気持ちを考える ③自分と相手との違いに気が付く ④自分の行動をコントロー

ルする力を養う事により、対人関係能力や社会性を伸ばすことである。対象は、知能検査 WISC-III または WPPSI で IQ90 前後の広汎性発達障害児 5~8 名。年齢は幼稚園の年長児または小学 1~3 年生である。評価は、知能検査、集団行動に関するソーシャルスキルチェックシート、自由記述でのアンケートを実施した。頻度は月 1~2 回、時間は 1 時間程度である。ST は 5 名程度で、進行・記録・補助など役割を分担している。

3. 方法

(1) 目標

グループ訓練では、『しっかりみよう じっくりきこう はっきりいおう』という目標を立てている。また、『いいしせい』『こえのおおきさ』も目標とすることにより、話を聞く・相手に伝える際の注意点をより具体的に示している。

グループ訓練の途中より、『あったかことばをつかおう』『はくしゅをしよう』を加え、友達に対して優しい言葉かけをすることや友達を褒めることも目

標に取り入れた。毎回の訓練ごとに子ども達と確認を行い、意識を促している(図 1)。

(図 1 グループ訓練の目標)



年間目標のなかの、「あったかことば」とは言われたらうれしい気持ちになる言葉であり、反対に「ちくちくことば」とは、言われたらいやな気持ちになる言葉のことである。「あったかことば」の学習は、場面設定課題で行い、年間を通して意識できるように促した。

(2)内容

訓練は、始まりの会・ウォーミングアップ・場面設定課題・ロールプレイ・終わりの会・保護者へのフィードバックの順に行う。

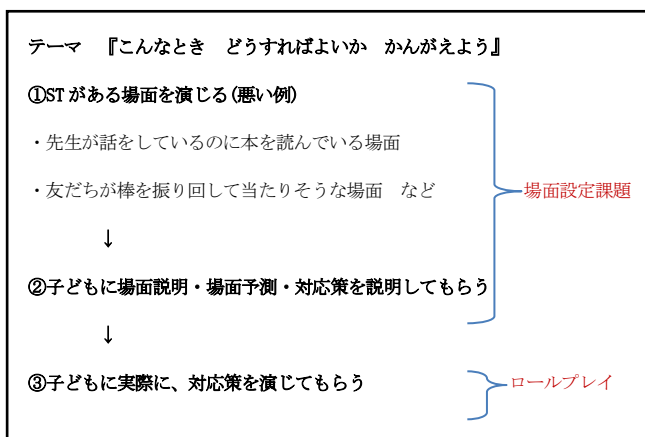
始まりの会では、スタッフと子どもたちの自己紹介、目標確認、スケジュールの確認を行う。ウォーミングアップは、感覚統合の要素を取り入れた体操を行う。ウォーミングアップの目的は、覚醒レベルの調節、感覚的欲求を満たし、注意・集中力を高める、心理的な緊張の緩和とされている。ST の動きを模倣する『まねっこたいそう』や紐の下をくぐり段をまたぐなどの障害物がある『サーキット』などを行った。ウォーミングアップ後は姿勢がよくなり、司会の ST への注目もよくなっている。

場面設定課題では、ST が集団生活のある場面についての例を演じ、子ども達に状況や対応策を説明してもらう。『あったか言葉をつかおう』『こんな時どうすればよいか考えよう』などのテーマで行っている。

『あったか言葉を使おう』という課題では、まずあったか言葉・ちくちく言葉の説明を行う。次に子ども達が実際にあったか言葉ちくちく言葉を考えてもらい、その後「探し物をしている人にはどう言えばよいか」「おなかが痛い人にはどう言えばよいか」等設定された場面に適したあったか言葉を発表する。

ロールプレイでは、場面設定課題で学習したことをもとに、設定された場面を実際に演じてもらう(図 2)。できるだけ、幼稚園や小学校での場面を組み込んで練習することで日常生活へ般化することを目標にしている。

(図 2 場面設定課題 ロールプレイの具体例)



終わりの会では子どもが、振り返りシートによる自己評価を行う。年間目標・今日の目標に対して○△×の3段階で評価する。保護者へのフィードバックは、ST と保護者が 1 対 1 で行い、課題の目的や訓練中の様子・家庭での様子を話し合う機会を設けている。その間、子ども達は『伝言ゲーム』『福笑い』など協力を必要とするゲームを行う。

(3)問題点と工夫

グループ訓練で、いくつかの問題点が出てきたため、環境設定や工夫をその都度行った(図 3)。

あったか言葉より「おそい」「たのしくない」などのちくちく言葉が目立った。そこで終わりの会でグループ訓練中に子どもたちが発言した、あったか言葉・ちくちく言葉を提示することであったか言葉が徐々に減った。発表する際にあてられていない子どもが待たずに先に答えることもあった。視覚的に順番を提示する、

マイクを渡すとあてられていない子どもが答える事が減った。プリントを先に配ると司会の ST に注目できないことに対して、教材は必要な時に配るようにすることで、注目できるように促した。ケースによって日常の問題点が異なることに対しては、ケースに合わせて個人目標を設定し、日常の問題点を各児のロールプレイに取り入れた。その他、ウォーミングアップの際、自分の立ち位置が分からない・自己フィードバックが難しいなどの問題があった。

(図 3 問題点と工夫・環境設定)

問題点	工夫・環境設定
ちくちく言葉が多い	・ 終わりの会であったか・ちくちく言葉を提示 →ちくちく言葉が減る
あてられていない子が答える	・ 発表の順番を提示する ・ マイクを渡す →あてられていない子が答えることが減る ・ 文字カードを用いて、視覚的に注意を促す
プリント配ると注目できない	・ プリント(教材)は必要な時に配る
日常の問題点が異なる	・ ケースに合わせて個別の目標を設定 ・ 各ケースの問題をロールプレイに取り入れる
立ち位置が分からない	・ 立つ場所に名前テープを貼る
自己フィードバックが難しい	・ ST が 1 対 1 で確認する ・ 帰りの際に ST がその日の様子について一人一人にコメントする

4. 結果

平成 23 年度に実施したグループ訓練の結果である。まず、ソーシャルスキルチェックシートについて説明する。ソーシャルスキルチェックシートとは、グループ訓練初回時と全 17 回の訓練の終了時に家庭と幼稚園・小学校の先生に記入を依頼し、集団行動での様子を 0～3 の 4 段階で評価したものである。内容は、①集団での協調行動。例として、〈集団に参加したり、関わったりする〉〈簡単なゲームのルールを理解できる〉などがある。②集団での自己コントロール。例として〈ゲームの勝負ごとで自分の負けを受け入れることができる〉〈物音や他人の行動で注意が

逸れない〉などがある。③友達や大人との関わり。例として〈友達を遊びなどの活動に誘う〉〈相手の意見を聞き入れる〉などがある。④コミュニケーション。例として〈会話や発言を自分からする〉〈視線を合わせて会話する〉などがあり、以上の 4 項目で構成されている。

保護者の評価では、コミュニケーションの項目の点数が上がり、幼稚園や学校では集団での自己コントロールの項目の点数が上がった(図 4)。

(図 4 グループ訓練初回時と終了時での得点差の平均)

	保護者	幼稚園 小学校
集団での協調性	+0.1	+1.0
集団での自己コントロール	-0.6	<u>+3.5</u>
友達との関わり	+4.1	-0.3
コミュニケーション	<u>+4.5</u>	+1.9

5. 変化点

グループ訓練内や幼稚園・学校に依頼したアンケートから得られた子ども達や保護者の変化点についてまとめる。子ども達は自分や他者の発言に対し「今のはちくちく言葉だった」「あったか言葉を使わないと駄目だよ」などの発言があり、ちくちく言葉が減った。幼稚園では友達が出来なかったが、グループ内の他の子に興味を持ち、初めて自分から名前を聞いた子どももいた。自信がなく人前で自己紹介ができなかった子どもが、自分から手をあげ、大きな声で答えられるようになった。

保護者のアンケートより、「家庭であったか言葉やちくちく言葉について話をするようになった」「相手の気持ちに気づかせるような声掛けをするなど、家庭での注意の仕方が変わった」、年長児の保護者からは「就学に向けた準備ができた」などの声が聞かれた。子ども達と保護者共に日常であったか言葉ちくちく言葉を意識できるようになっている。

幼稚園や小学校の先生のアンケートより、「人の嫌がることはしない、という意識がみられるようにな

った」「分からないことを担任に聞くようになった」などの回答が得られ、集団生活でも変化がみられている。

6. 考察

グループ訓練では、大人との1対1の場面とは異なり、複数の子どもが参加することにより、周りを見ずに行動する、友達に感情をぶつけるといった場面がみられることもある。こうした場面を、場面設定課題やロールプレイに取り入れることにより、個別訓練では行えなかった対応が可能となった。また、グループ訓練の様子から、幼稚園や学校での問題点も予測しやすくなり、集団生活の中で生かせる課題設定を考えることができた。保護者とのフィードバックなどを通して情報交換を繰り返すにより、内容を深めより日常に沿った課題設定を考えることが出来る。

さらに充実したグループ訓練を行うために個人にあった工夫や環境設定、課題設定を考えていくことが必要である。また、アンケートの結果より、幼稚園や小学校の先生から『グループ訓練の内容を教えてほしい』『幼稚園でできることがあればアドバイスがほしい』などの声がきかれた。そこで全17回の訓練終了後にグループ訓練の課題内容と、ソーシャルスキルチェックシートの結果をまとめて郵送し、情報の共有をしている。

今年度はSSTグループ訓練を新しいメンバーで、幼稚園の年長児と小学1年生・小学2～3年生の2グループ行った。より充実したグループ訓練を行うために前回のグループ訓練で行った工夫や環境設定を取り入れた。また、保護者とのフィードバックをもとに、日常の問題点をロールプレイに取り入れ、それぞれの子どもにあった課題設定を考えていくことができた。小学2～3年生のグループでは、各個人の目標も立て子ども達と保護者にも伝えた。これからも、より集団生活の中で生かせる課題設定を行うために幼稚園や学校との情報交換を密に行うことが重要だと考える。

【参考文献】

- 1) 上野一彦 他：【特別支援教育】実践ソーシャルスキルマニュアル, 18 刊版, 明治図書,2012
- 2) 伴光明 他：自閉症スペクトラム SST スタートブック, チームで進める社会性とコミュニケーションの支援,2 版, 学苑社,2011
- 3) わかりやすい発達障がい・知的障がいの SST 実践マニュアル, 初版, 中央法規出版株式会社,2011